

ドル/円相場のトレード戦略

■ 中長期展望

注目されていた英国の国民投票の結果は、大方の予想を裏切る EU 離脱となりました。ドル/円相場は直近の安値103円55銭をあっさり割り込み、2013年11月以来の100円割れとなり、一時99円ちょうどの安値まで下落しました。

【ドル/円 週足】



英国の EU 離脱は世界経済の先行き不透明感を強め、また米国の早期利上げを妨げるものと捉えられており、中期的にドル/円は円安に大きく戻る見通しはとて描けず、95円割れをもイメージする必要が出てきました。

95円水準は、2011年の安値から2015年の高値の61.8%戻しとなっており、当面のドル/円の下値の目処となります。

しかし、52週移動平均との乖離で見ると、6月24日につけた99円では約15%の下方乖離となり、リーマンショックを受けドルが下落した2008年の下方乖離とほぼ同じ水準になりことから、過度な下がり過ぎの反動での短期的なドルの戻りも期待され、また日本のリコプターマネー政策への思惑が円の上値を抑える要因となっていることから、100円～110円のレンジ相場の継続が意識されてきました。

ただし、8月に入ってからのドルの戻りは非常に鈍く、上値の重さが際立ってきており、年末に向けてのドル安リスクが高まってきていることには注意が必要であり、日米に金融政策の行方を見極めたいところです。

ドル/円相場のトレード戦略

■ 短期展望

先週は、夏季休暇で薄商いのなか、まとまった円買いにより 99 円台での下押しを数回試す動きとなりました。

しかし、米 NY 連銀総裁ダドリー総裁がインタビューで 9 月利上げはあり得るとタカ派発言をしたことや金融庁・財務省・日銀の臨時緊急会合が行なわれ、市場安定の為に注意深く市場の動きをチェックするとの発言をしたことなどを受けて、下抜けは失敗に終わっています。

今週は 26 日にイエレン米 FRB 議長のジャクソンホールでの経済シンポジウムにおける講演が予定されており、米国の金融政策の行方を占う重要イベントであるため、その内容を確認するまでは、大きくは仕掛けにくく 99 円～102 円でのレンジ相場が継続される可能性が高いと思われます。ただし、米国の早期利上げ期待が剥落する展開となれば、一段と円高が進むリスクには注意が必要であり、その場合は 97 円程度までの円高進行の可能性が警戒されます。